

中国考古資料から見た猿投窯陰刻花文の祖型とその分類

張 睿帆

名古屋大学大学院 博士後期課程3年

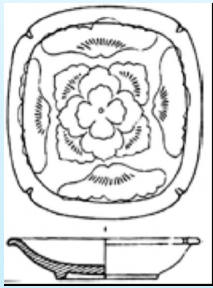


図1 大徳和尚墓出土黄釉印花文皿（陝西省考研究院2018）

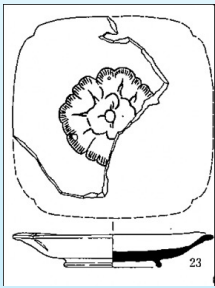


図2 平安京冷然院跡出土緑釉陰刻花文皿（京都市埋文1984）



図3 何家村出土蓮弁文金碗の底部内面文様（斉2022）



図4 七曲1号窯出土陰刻花文皿の底部内面文様（豊田市教委2007）

一、研究の背景と課題：施釉陶器上の陰刻花文の祖型

【背景】9世紀以降の平安時代施釉陶器の陰刻花文のモデルについては、これまで主に中国越州窯青磁説（矢部1982）、中国金属器説（前川1987）、日本国産金工品説（巽1985）という三つの見解があった。

【現状の課題】しかし、越州窯青磁説は近年以来の検証によって下火であり、また中国金属器や日本国産金工品をもとにしたという説は、いずれも実証が極めて少ない。

二、本研究の資料と目的：もう一つの可能性

耀州窯印花文磁との関係を提示したい。年代が明らかで器形が類似する資料の文様を、耀州窯印花文磁と日本の平安時代施釉陶器を比較し、その類似性を示す。

三、資料の精査と分類

紀年銘資料として、中国陝西省韓原の大徳和尚墓（830年）から出土した印花文四方皿（図1）がある。これは文様が日本施釉陶器の陰刻花文のイメージとほぼ一致する。加えて、平安時代の緑釉陶器では器形も類似する（図2）。

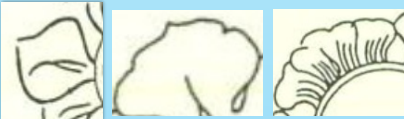
また、中国陶磁器と類似する事例が存在する一方で、中国金属器が平安時代陶磁器の陰刻花文のモデルの一つとなった可能性も十分にある。例えば、唐代中国の金属器に一般的に見られる三重花卉＋二重花蕊という形式（図3）の陰刻花文は、猿投窯でも見られた（図4）。

四、陰刻花文の中核花卉の分類

Aa類：二本の弧線に表現する。先端が連続せず、明らかに線が途切れるもの。

Ab類：Aa類と類似するが、原則として、流れるような一筆書きのもの。

B類：三本の弧線を表現する。描式は三本とも続けて一筆書きのもの（Bb）と、途切れるもの（Ba）がある。



Aa類

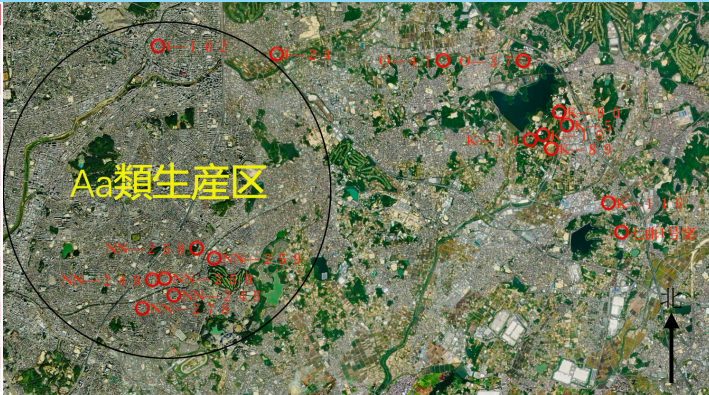
Ab類

B類

五、結論と今後の展望

猿投窯において、現時点で確認できる陰刻花文を生産した窯跡は16ヶ所があり、いずれも操業年代は9世紀内に収まる。また、窯跡から出土した陰刻宝相花文の画数の検討を通して、Aa類の陰刻花文は、K-89、K-90号窯を除いて、ほとんど鳴海地区の周辺から出土する。つまり、線刻技法とその分布の偏りから、鳴海地区は黒笹地区周辺と異なる画工集団が存在する可能性が高いと考えられる。

窯跡番号	所属窯式期	所属窯区	陰刻花文の器種	中核花卉の種類
K-14	K-14	黒笹	碗、皿	B
K-116	K-14	黒笹	三足盤	B
七曲1号窯	K-14	黒笹	皿、段皿、三足盤	Aa
K-5	K-14～K-90	黒笹	碗、皿	Ab、B
NN-258	K-14～K-90	鳴海	皿	Aa
NN-259	K-14～K-90	鳴海	碗、段皿、盤口瓶	Aa
K-90	K-90	黒笹	碗、皿、手付瓶、枕	Aa、Ab、B
K-89	K-90	黒笹	碗、皿、手付瓶	Aa、Ab、B
K-15	K-90	黒笹	碗、皿	Ab、B
NN-278	K-90	鳴海	碗、皿	Aa
NN-245（亀ヶ洞1号窯）	K-90	鳴海	碗、皿、手付瓶	Aa、Ab、B
NN-249、250（熊ノ前）	K-90	鳴海	碗、皿、三足盤	Aa、Ab、B
0-41	K-90	折戸	碗	Ab、B
0-37（海老池1号窯）	K-90	折戸	碗、皿	Ab、B
I-102（鴻ノ巣古窯）	K-90	岩崎	碗、瓶	Aa、B
I-24	K-90	岩崎	碗、瓶	B



【参考文献】

京都市埋蔵文化財研究所 1984『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
巽淳一郎 1985『陶磁（原始・古代編）』『日本の美術』NO.235
豊田市教育委員会 2007『明蓮1～4号窯跡・七曲1号窯跡』
前川要 1987『平安時代における東海緑釉陶器の使用形態について』『中近世土器の基礎研究』3

三好市教育委員会 2013『愛知県猿投山西南麓古窯跡群 黒笹90号窯跡』
矢部良明 1982『晩唐五代の越州窯青磁と平安前期の緑釉陶・灰釉陶の相関関係』
『考古学ジャーナル』211
陝西省考古研究院編 2018『西安長安区韓家湾墓地発掘報告』三秦出版社
斉東方 2022『唐代金銀器研究』上海古籍出版社